セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.18

編集 発行 代表者 1988・10・25
佐賀県立九州陶磁文化館
牟田口　尚
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100－1
電話 0955－43－3681
印刷所 三光印刷株式会社
佐賀県伊万里市新天町287－3

染付蓮文三脚付香炉（そめつけはすもんみつあしつきこうろ）　館蔵資料

長崎・亀山焼　天保13年（1842）
口径9.4㎝　胴径11.2㎝
高さ12.5㎝　脚間7.9㎝

亀山焼は文化年間から慶応元年まで焼造され、染付の優品を多く生み出した。この香炉は、胴部に蓮華・葉を染付の線描きと濃淡で巧妙に描く。また口部には蓮唐草文と家紋風の丸文が入る。胴の裏側に「崎陽於亀山製　為當眼院菩提施入之　天保十三壬寅歳　八月八日　施主青木貞幹」の染付銘が入り、制作年を知る貴重な作例である。

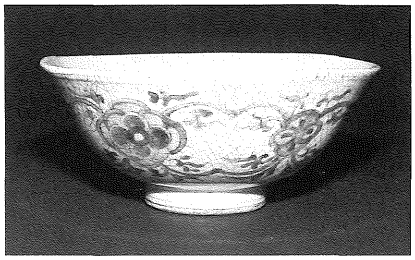
昭和63年度企画展

「長崎の陶磁」展から

今秋10月22日(土)から11月27日(日)まで開催される展覧会「長崎の陶磁」には 320点が陳列される。

三川内焼、波佐見焼は現在でも長崎県を代表する窯業地として栄えているが、江戸時代のある時期だけに焼成され、まもなく廃窯された窯も少くない。

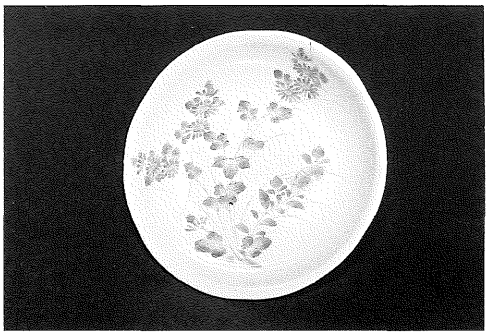
肥前のやきものといえば古唐津・古伊万里が有名であるが、それらの中に混同されている長崎の窯の作品も数多くある。この展覧会ではいまいちど長崎の陶磁器をあらためてみつめなおしてみようとするものです。現川焼や亀山焼の数多さには目をみはらされることであろう。展示される作品の中からいくつかを選んで紹介する。



染付唐草文茶碗　平戸焼・中野窯　17世紀後半

口径15.6cm　高さ 7.0cm　高台径 5.5cm

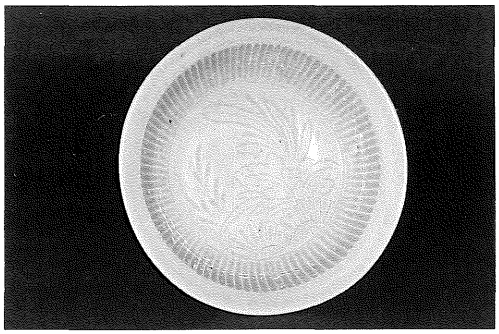
松浦史料博物館蔵　陶器質の素地の全面に白土で化粧をして、その上に呉須で文様を描く。腰下の梅花唐草文は、中野窯出土陶片に類似の文様がみられる。



染付秋草文鉢　三川内焼　享保８年(1723)

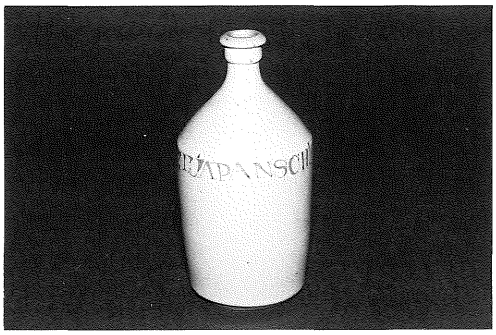
口径14.1cm　高さ4.0cm　高台径7.4cm

丁寧な筆致で菊文様を描く。有田・南川原山の作風に似る。高台内に「奉納肥前平戸　松浦肥前守内　玉置山　牧山氏廷林　享保八年卯」の染付銘がある。

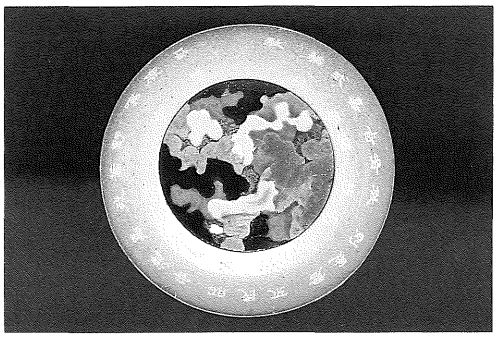


青磁陰刻草花文三脚付鉢　波佐見焼　17世紀後半～18世紀前半　口径31.4cm　高さ9.2cm　高台径13.5cm

内面はヘラ目で菊花と草文を、その周囲に鎬文をあらわす。底は蛇の目状の釉はぎにチャツ（焼成台）の跡。高台の外三方に小さな脚をとりつけている。



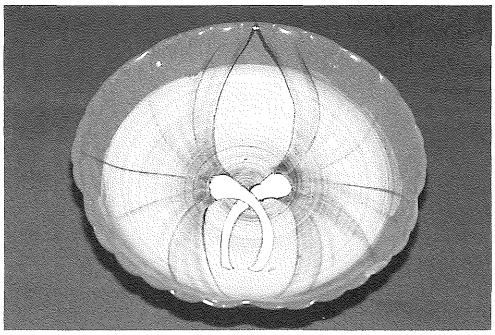
染付洋字文酒瓶(コンプラ瓶)　波佐見焼　19世紀中頃　口径 3.2cm　高さ20.2cm　高台径 7.0cm　胴径 9.5cm　長崎市立博物館蔵　コンプラ仲間は出島でオランダ人相手に日用品を売った商人の組合。胴上部に染付「１STE. SOORT. JAPANSCHZAKY.」



三彩詩文大皿　長与焼　18世紀末～19世紀初

口径31.4cm　高さ 9.2cm　高台径13.5cm

無釉の周囲に白釉文字で詩経、小雅、鹿鳴より抜書。「呦呦鹿鳴食野之苹……」　見込と外面には白・黄・緑・濃紫の色釉で彩色。高台内に目跡が５点残る。



刷毛目抱銀杏文鉢　現川焼　1691～1749頃

口径19.2cm　高さ4.3cm　高台径9.9cm

つかさコレクション蔵　口を波縁につくる。口まわりを除いて内外に白土を渦状に刷毛で塗り、内面に鉄砂で抱銀杏（だきいちょう）をあらわし、白土と緑釉でいろどる。

染付牡丹文皿　亀山焼・僧鉄翁画　文政９年(1826)

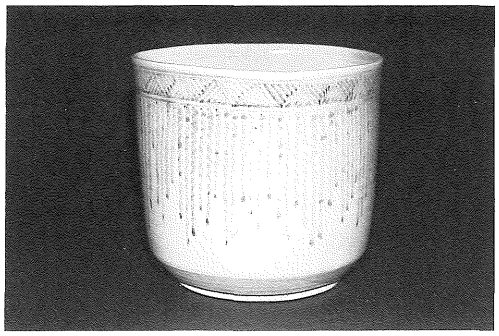
口径26.3cm　高さ6.3cm　高台径4.7cm

長崎市立博物館蔵　僧鉄翁（1791～1871）は長崎の臨済宗春徳寺住職。崎陽三筆のひとり。染付銘「時丙戌　首夏　妙言写」　裏面三方に蘭を描く。

染付字文小鉢　鵬ヶ崎焼　1823～1852

口径13.3cm　高さ2.7cm　長崎市立博物館蔵

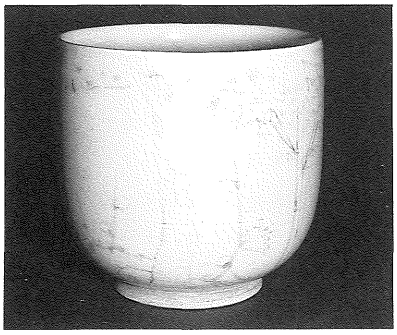
変形の鉢の内面に染付「萬頃波光水上下両堤秋色月東西」　底に陽刻印「鵬崎□」　底の四方に貝形の小さな脚がつく。



染付縄のれん文水指　釜山・和館窯　17世紀後半

口径9.8cm　高さ9.7cm　高台径5.7cm

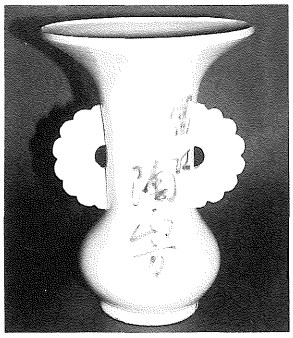
和館窯は対馬藩宗家の経営した窯で茶陶を作った。朝鮮から陶土・陶工の援助をうけた。陶工頭は宗家から派遣され、その一人中庭茂三の作と伝えられる。



染付松竹梅文筒茶碗　対州焼・志賀窯　18～19世紀

口径9.8cm　高さ9.7cm　高台径5.7cm

見込には逆の「の」の字状のロクロ目がある。高台内にも逆の「の」字状の削り跡がある。染付銘「シカ」　染付の松竹梅文は丁寧に描かれている。端正な筒形茶碗。



染付菊耳花瓶　五島焼・富江窯　1805～19世紀中頃

口径24.0cm　高さ35.8cm　高台径12.2cm

表に「奉寄進」　裏に「富江　陶山方」と染付。富江窯は五島富江町田野江宝性院裏手にあり、明治初年まで焼かれた。窯跡は現在も残っている。（吉永陽三）

〈速報〉

嬉野町吉田２号窯跡の調査

当館は江戸時代蓮池藩領の窯場であった吉田山のうち、２号窯跡（藤津郡嬉野町吉田）の発掘調査を８月１日～８日に実施した。

この窯場は中島浩氣『肥前陶磁史考』（昭11）によれば、寛永16年（1639）に隠居した初代藩主鍋島直澄が産業奨励を志し、吉田の陶山を発展させようとして、旧領地の有田郷南川原より副島、牟田、金ヶ江、家永の４人を招いて指導者とし、従来の小窯を廃して大窯に改築し、その製造と販売に便宜を与えたとある。

確実な記録の上で、吉田山の名の初見は「龍泉寺過去帳」（西有田町）の寛文２年（1662）であり、その後、寛文７年まで計７人の名が見える。また元禄４年（1691）に始まる「浄源寺過去帳」（同町）に吉田皿屋の人名が享保18年（1733）まで見える。このことは吉田山に有田の陶業者が移住したことを物語っている。

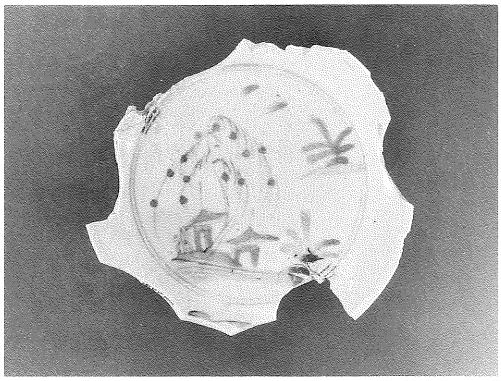
調査は1200㎡程の窯跡に対して、４個所計約17㎡のグリッドを設定して発掘した。その結果、窯本体は最後の窯つまり明治・大正期に終った窯の一部を確認した。窯は南から北へ登っているが全体に破壊が著しいと推測される。それより以前の窯体は未確認である。

物原の堆積は厚く、約2.8ｍ掘り下げてもなお地山に達しない。出土品は下層から1650～70年代の染付の小皿（図１）・碗・火入・瓶と白磁の中・大皿（図２）多数が出土し、それに赤絵付した中・大皿片が８点発見された。中国呉須赤絵を写した印判文仙境図大皿である（図３）。

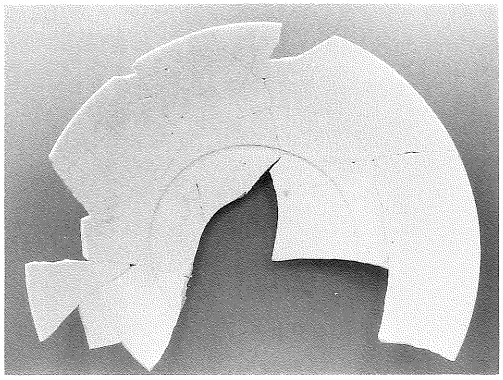
1690年～18世紀中葉には染付の碗・小皿を焼き、コンニャク印判装飾を行っている。18世紀後半～1810年代の製品としては染付の筒形碗や広東形碗があり、1820年～幕末の製品には染付の端反碗・小深丸碗がある。明治・大正には染付型紙摺碗などを焼き、釉下彩磁器や銅版転写の製品も少量ある。

以上のように、この窯の操業年代は1650年代ごろから明治・大正までと推測されるが、この間、19世紀になると素地が白くなる。これは寛政（1790年代）ごろに天草陶石を導入したといわれるのと関係があろう。1650～70年代の素地は灰色であり、吉田の陶石を用いたものと推測される。この初期の吉田２号窯の陶片は化学分析の結果、有田の素地と著しく異なることが判明し、その素地に赤絵付した大皿が限られた時期に焼かれた。有田以外の肥前でこのような初期に赤絵を焼いたことが明らかになったのは初めてのことであり、肥前の色絵の歴史に重要な１頁を加えることになった。

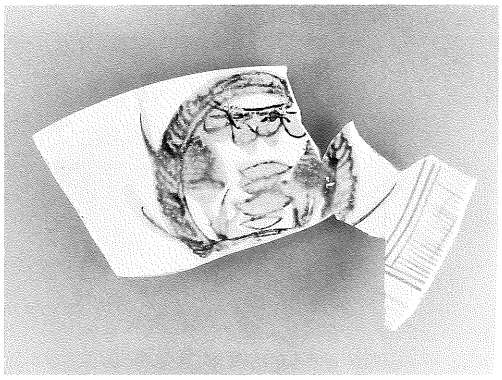
（大橋康二）



1．染付柳山水文小皿
口径14.3㎝　高2.7㎝　底径7.1㎝



2．白磁大皿
口径31.2㎝　高7.7㎝　底径13.7㎝



3．色絵印判文仙境図大皿
長軸18.7㎝（皿の側面部の破片）

シリーズ
やきものにみる文様 (15)
宝尽文様

万葉集五・八〇三「銀（しろがね）も金（くがね）も玉も何せむにまされる多可良（たから）子にしかめやも〈山上憶良〉」とあるように古代から宝については金銀・珠玉などの貴重な品をいってきた。そして宝は人々の欲望の対象として、それをめぐる悲喜劇がうまれてきた。「たから多ければ身を害す」「たからの山に入りながら手を空しくして帰る」「たからは身の差合せ」などといった人生哲学的なことわざも多い。

鍋島の皿や壺には種々の宝を描きこんだ作品がある。望む物を思うままに出すことができるという如意宝珠や打出の小槌。着用すれば透明人間になれる隠蓑や隠笠。知恵の宝庫である巻子や冊子。巾着には銭貨、お守り、香料などを入れる。それはまた金嚢・砂金袋ともよばれる。丁子（丁字）は南方産の花の実で乾燥したものを丁香といい香料・医薬となる。法螺貝は八宝のひとつで戦の合図に使われ、また密教の灌頂用具である。高僧のもつ払子（蝿を追い払う具）。扇子は八仙のひとりである鐘離の持物。宝剣も八仙のひとり呂洞賓の特物。八仙人の持物は暗八仙といわれている。

楽器では笙、びんざさら（編本・拍板、田楽の主要楽器）、鐃鈸（シンバルのようなもの）がある。この写真にみえる宝尽文様は以上であるが、別の作品にはほかに銀行のマークとして知られる分銅や、七宝（これについてはこのシリーズ(2)を参照）、如意宝珠に火焔をともなった火焔宝珠、そして宝鑰（宝庫をあける鍵）などが描かれている。

色絵宝尽文八角皿　鍋島藩窯・18世紀初
今右衛門古陶磁参考館蔵

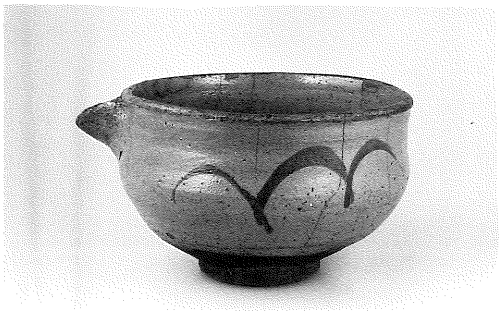
（吉永陽三）

シリーズ
やきものの技法 (15)
鉄絵

鉄分を多く含む顔料で描く技法。錆絵や鉄砂と同じだが、鉄砂の場合は釉薬を意味することもある。鉄絵は透明釉の下に描かれる釉下彩の一種である。酸化鉄による呈色のため、黒褐色の絵文様となる。

鉄を釉下彩として用いた早い例は、宋時代の磁州窯の製品があげられる。中国ではこれらを、釉下黒彩や白地黒花と表現している。鉄絵の陶磁器は、14世紀ごろの安南（ベトナム）や宋胡録（タイ）にも多く見られる。朝鮮では、15世紀から16世紀にかけて、化粧土の上から鉄絵具で描いた粉青沙器鉄絵があり、また16世紀から17世紀にかけての白磁鉄絵がある。日本の茶人は前者を絵粉引（または絵刷毛目）、後者を鉄砂と呼んだ。

我国で鉄絵が最も早く現れるのは、志野と唐津である。どちらとも天正年間まではさかのぼることができる。志野の鉄絵は、釉が長石分の多い失透性のものであるため、唐津ほど文様がはっきりと現れず、見え隠れする文様が味わい深い趣きを呈する。唐津は朝鮮の粉青沙器鉄絵や白磁鉄絵の系統に連なると考えられる。前者は化粧土の上の鉄絵であり、後者は磁胎である。陶胎に直接絵付けした絵唐津は、技法的には李朝の白磁鉄絵に近い。化粧土の上に鉄絵と銅緑彩を施した二彩唐津は、粉青沙器鉄絵に類している。



絵唐津草文片口
阿房谷窯　16C末～17C初　館蔵

写真の片口は、枇杷色の地に黒褐色の鉄絵草文が描かれている。勢いのある筆運びは絵唐津の特徴であり簡略化された種々の文様がある。京焼における乾山の錆絵などは水墨画的な表現であるが、鉄絵は概して簡素で力強い作風である。

（鈴田由紀夫）

〈企画展より〉

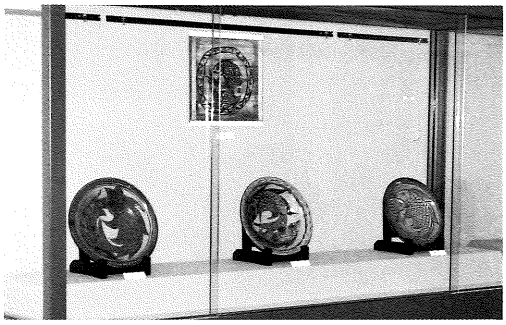
琉球陶器の最高峰
人間国宝　金城次郎のわざ

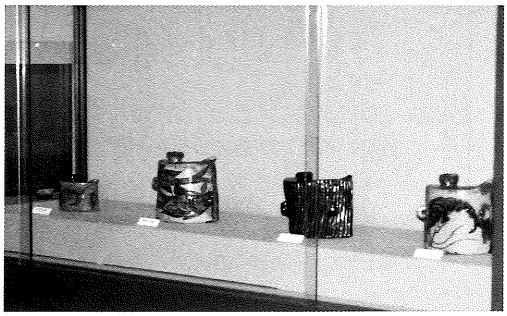
主催　朝日新聞社　佐賀県立九州陶磁文化館
会期　昭和63年６月10日(金)～７月３日(日)
会場　第１、２展示室

金城次郎展は沖縄の陶芸・壺屋焼の重要無形文化財技術保持者（人間国宝）・金城次郎氏の喜寿を記念して行われたもので、作陶生活60余年の代表作と関連資料149点が展示された。

金城氏は沖縄県那覇市与儀に生まれ、12歳で見習工となった。大正末から昭和10年代にかけて沖縄を訪れた濱田庄司、柳宗悦、河井寛次郎等から大きな影響を受け、作陶を生涯の仕事とすることを決意したと言われている。壺屋焼は中国、朝鮮、東南アジアの技法が交り合った作風であるといわれ、金城氏はその伝統を継承して、刷毛目、三島手、指描き、三彩、赤絵など多彩な陶技を展開し、なかでも大胆な線彫りの魚文、海老文は代表的な文様として知られている。

有田は焼物の産地であるが、磁器が中心で、金城氏の様な独特な個性をただよわせる作風に触れる機会は少なく、それだけに熱心な陶芸ファンが多く訪れ、作品に見入っていた。





〈企画展より〉

ハニワとウツワ
松尾次郎展

昭和63年８月25日(木)から９月４日(日)まで松尾次郎展が開催された。ハニワと題された手びねりのオブジェは、どれも高さが40～50㎝、大きいもので１ｍほどあり、古代の埴輪のコピーというわけではなく、むしろ縄文時代の火焔型土器のイメージにも近く、またアントニオ・ガウディの建築の様でもある。20点をこえるハニワが会場一杯に展示された様は壮観で、見る者を引きつける。またウツワは松尾氏のモノ作りの原点とも言うべき飯茶碗をはじめ壺や鉢、皿、徳利、盃など多種にわたり、印花を施した陶板のシリーズも大いに楽しませてくれるものであった。会期中、多くの方がたが観覧され、盛況の内に終了した。

（宇治　章）

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館　年末年始(12月28日～１月４日)休館
観覧料　一般200円（150円）／大学・高校生150円(100円）／中・小学生70円（50円）／( )内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交　通　佐世保線有田駅下車徒歩15分